

捕鯨研究の活性化を！

赤嶺 淳（一橋大学大学院社会学研究科）

日本の捕鯨史上、2024年は節目の年であった。

東洋漁業株式会社が近代捕鯨業を確立して120年、その後継たる日本捕鯨株式会社が南氷洋操業に着手して90年にあたる。30余年にわたって日本の捕鯨業を牽引してきた日新丸にかわって関鯨丸も竣工した。基地式捕鯨でもニタリクジラの捕獲に成功したし、母船式捕鯨では約50年ぶりに北太平洋においてナガスクジラの捕獲が再開された。

こうした事情からであろうか、メディアで捕鯨がとりあげられることも少なくなかった。このこと自体はありがたいことである。しかし、だからといって捕鯨への関心が高まり、理解が深まったとは思えない。

何故か？ テレビも新聞も、似たようなストーリーで、それぞれ独自の視点が提示されていなかったからである。それもそのはず。仕事柄、記者と会話をすることも少なくないが、不勉強さにあきれることしばしば、である。これでは視聴者や読者が白けた気持ちになるのも無理はない。もちろん、そうした環境を許してきた主因は、わたしをふくめた捕鯨研究者の怠慢にある。学術的な発信も社会との対話も、心許ないものだったからである。

そもそも、水産学部や農学部、理学部などで組織的に教育と研究がなされる鯨類についての生物学・生態学的研究（鯨類学）とは異なり、人間／社会と鯨類との関係性を問う捕鯨研究は個人が担ってき

た。その意味において捕鯨研究の活性化は困難な状況にある。

こうした認識にたつ本稿では、捕鯨研究の「危機」を打開するために、捕鯨研究の現状を俯瞰し、その動向を分析したい。依拠するのは、科学研究費助成事業データベース（以下、KAKEN）である。本データベースは1964年度からの60年間に科学研究費補助金（以下、科研費）によって実施された1,061,069件を収録する目録である。

日本における捕鯨研究

KAKENで捕鯨を検索すると、229件が抽出された（2024年11月13日現在）。そのうち研究課題名に捕鯨が附されたもの（以下、研究群A）は22件、課題名に捕鯨が附されておらずとも、キーワードとして捕鯨が登録されたもの（以下、研究群B）は29件であった¹⁾。残りの178件は、鯨類学研究のなかで捕鯨に言及されたものである。本稿の分析対象外とする。

もちろん、捕鯨研究は、この51件だけに限定されるわけではない。わたしの事例で説明しよう。2001年に科研費への申請資格を得てから、これまで11件の研究代表をつとめてきた。そのなかで研究課題名に捕鯨を附したのは、「近代産業遺産としての捕鯨の記憶——捕鯨問題と文化多様性」（2013年～2015年）の1件だけである。また、キーワードに捕鯨を登録したのは「フロンティア社会論」再考（2016年～2018年）の1件だけ

であった。

このように本稿が分析対象とするのは、捕鯨研究の一端にすぎない。とはいえ、研究者みずからが課題名とキーワードに捕鯨を選択するという決断は、その分だけ捕鯨問題と向きあう決意を示すものである。その姿勢を尊重したい。

課題名に捕鯨をもつ研究

KAKENにおける捕鯨研究の初出は1981年度の奨励研究B（歴史）「捕鯨業の発展と紀州太地浦——近世初期の漁村構造について」であった（表1）。研究代表者は県史編纂班長をつとめていた笠原正夫氏である。『和歌山県史』は1975年3月から1994年3月まで20年間にわたり、24巻が刊行されるという大業であった。県史編纂の当事者として、笠原氏もかなりの熱量を注いだにちがいない。

それにしても、である。笠原氏以降、1980年代からの30年間に8件の科研費しか採択されていないのは、どうしたことか？ 本稿を構想するにあたり、わたしは商業捕鯨のモラトリアムが決まり、調査捕鯨がはじまった1980年代に捕鯨研究が隆盛したものと考えていた。

しかし、実際に採択件数の増加が顕著になるのは2010年代以降のことであった。分野的に文化人類学と日本史が目立つことは想像できたが、政治学をはじめとして多様な分野に広がっているのは想定外であった（表2参照）。

もちろん、そのこと自体は歓迎

すべきことである。捕鯨研究の多様化につながり、その分だけ、捕鯨への理解が深まることが期待できるからである。

他方、表1を一瞥すれば、全期間を通じて基盤研究Cを中心とする個人研究がほとんどであることに気づくはずだ。だからこそ、近世外交史研究の荒野泰典氏が組織した基盤研究A「グローバリゼーションと反グローバリゼーションの相克——捕鯨を手がかりとして」(2004年～2007年)の存在がきわだっている。

4年計画の折り返し点において、それまでの研究を総括した荒野氏は、「捕鯨史を系統的かつ総合的に理解するためには、日本列島だけではなく過去に捕鯨をおこなってきた朝鮮や現在でも小型鯨類を捕獲している琉球、寄鯨を祀るベトナムなどの東アジアの事例を集積し、捕鯨をアジア全体のなかで捉える必要性」を説いている²⁾(傍点は引用者)。

インターネットで入手できない『立教大学日本学研究所年報』という雑誌に発表されたものだからだろうし、その後には荒野氏自身が捕鯨史を叙述することがなかったためであろう。従来捕鯨史研究でほとんど言及されることのない指摘であるが、わたし自身の韓半島における調査からしても³⁾、荒野氏の着眼に感服せざるをえない。また、同氏の指摘から20年がたった今日、オスロ大学で宗教学／日本研究を講じるAike P. Rots氏が、日本における鯨類供養の慣行とベトナム中部における鯨廟の比較研究をおこなっていることも⁴⁾、荒野氏の構想が正鵠を射たものであった傍証となろう。

荒野氏以外で特筆すべきは、文化人類学者で北米大陸の先住民研究をおこなう岸上伸啓

表1 研究課題名に捕鯨を附した科研費プロジェクト一覧(22件) [2024年11月13日現在]

代表者	課題名	種目	分野	開始	最終	個人*
日尾野裕一	近代イギリス捕鯨業とポリティカル・エコロジー	若手研究	ヨーロッパ史およびアメリカ史	2024	2026	○
大久保彩子	多国間鯨類管理レジームの行方——変革期の国際捕鯨委員会と地域協力体制の相互連関	基盤C	国際関係論	2023	2027	○
久原広幸	江戸時代の西海捕鯨地域に存在した鯨組の仕事唄に関する探索と復元	基盤C	芸術実践論	2023	2025	○
LEWIS, Jonathan	Domestic and International Online Discourse on Polarized Issues: The Case of Japanese Whaling	基盤C	政治学	2019	2021	○
古賀康士	日本在来捕鯨業の総合的研究——組織・制度・資源動員の比較史	若手B	日本史・経済史	2017	2018	○
浜口 尚	鯨類資源利用の新形態——捕鯨とホエール・ウォッチングの共存をめざす人類学的研究	基盤C	文化人類学・民俗学	2017	2019	○
岸上 伸啓	グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究——伝統継承と反捕鯨運動の相克	基盤A	文化人類学・民俗学	2015	2018	6
末田智樹	近世日本海沿岸の鯨組と漁場と捕獲鯨の関係性に関する研究	基盤C	日本史	2015	2017	○
高野義幸	鯨の教材化に関する調査研究——大型鯨類の生態と捕鯨問題を中心に	奨励	教化教育学II(理科学系)	2014		○
宇仁義和	明治大正期に遡る一次資料「事業場長必携」を用いた東洋捕鯨の操業復元	基盤C	科学社会学・科学技術史	2014	2016	5
赤嶺 淳	近代産業遺産としての捕鯨の記憶——捕鯨問題と文化多様性	挑戦的萌芽	地域研究	2013	2015	2
森田勝昭	被災した小型捕鯨業と捕鯨文化コミュニティの歴史動態と復興に関する社会人類学的研究	基盤C	震災問題と人文学・社会科学	2013	2015	○
浜口 尚	現代社会における先住民生存捕鯨の社会文化的意義	基盤C	文化人類学・民俗学	2013	2016	○
野村 康	日本の環境NGOの政治学的研究——自然保護問題(特に捕鯨関係)を中心に	若手B	政治学	2012	2014	○
岸上伸啓	北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権	基盤B	文化人類学・民俗学	2009	2013	○
荒野泰典	グローバリゼーションと反グローバリゼーションの相克——捕鯨を手がかりとして	基盤A	地域研究	2004	2007	6
宇仁義和	アイヌ文化における捕鯨の検討	奨励	歴史	2003	2003	○
鬼頭秀一	科学技術倫理としての環境倫理に関する理論的・実証的研究——捕鯨技術を中心として	基盤C	科学技術史(含科学社会学・科学技術基礎論)	1995	1997	○
畑中久泰	菱文庫を起点とする欧米日捕鯨文化史の比較研究	奨励B	歴史	1990	1990	○
小山良昌	北海道山口藩支配地における半官半民営捕鯨会社の創立——ノルウェー式捕鯨業の導入	奨励B	歴史	1984	1984	○
鳥巢京一	19世紀末・20世紀初頭における日本沿海捕鯨の動向と国際的環境	奨励A	経済史	1983	1983	○
笠原正夫	捕鯨業の発展と紀州太地浦——近世初期の漁村構造について	奨励B	歴史	1981	1981	○

出典：KAKENより筆者作成。

*：○は個人研究、アラビア数字は研究代表者をふくむ共同研究者の人数。

表2 捕鯨を課題名にふくむ科研費プロジェクトの種目と分野(2010年以降)

	2010-14	2015-19	2020-24	計
基盤A		文化人類学		1
基盤C	文化人類学, 震災問題と人文学, 科学技術史	日本史, 文化人類学, 政治学	国際関係論, 芸術実践論	8
萌芽	地域研究			1
若手			ヨーロッパ史	1
若手B	政治学	日本史(経済史)		2
奨励	教化教育学II(理科学系)			1
計	6	5	3	14

出所：KAKENHIから筆者作成。

分野名は研究内容に則して省略した。

氏が組織したふたつの研究である。基盤研究B「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」(2009年～2013年)は単独で遂行されたものである。しかし、同氏は2008年度から2010年度にかけて、勤務する国立民族学博物館の共同研究「捕鯨文化に関する実践人類学的研究」を組織し、『捕鯨の文化人類学』(成山堂書店、2012年)と*Anthropological Studies of Whaling* (国立民族学博物館、2013年)を上梓している。

その後も2015年度から4年間にわたり基盤研究A「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究」を組織するとともに共同研究「捕鯨と環境倫理」(2016年度～2019年度)も開催し、『世界の捕鯨文化』(国立民族学博物館、2019年)、『捕鯨と反捕鯨のあいだに』(臨川書店、2020年)、*World Whaling: Historical and Contemporary Studies* (国立民族学博物館、2021年)を問うたように、同氏は2000代中葉から日本の捕鯨研究を牽引してきた第一人者である。

キーワードとして 捕鯨をかかげる研究

研究群Bは1990年代以降に限定される(表3)。2010年代以降のものが19件(66%)ときわだつ傾向は、研究群Aとおなじである。しかし、両者の差異は、前者において国際法学が5件と突出している点にある。否、研究群Aでは国際法学が皆無であったことと対照的である。もちろん、この動向は、2010年5月に国際司法裁判所(ICJ)への提訴があり、その判決が2014年

3月にあったことと無関係ではなし⁵⁾。

もう1点、時宜を得た研究動向を指摘しておきたい。社会学者の河島基弘氏と哲学者の浜野喬士氏が、2010年代初頭に人間と動物の関係性についての研究を実施していることである⁶⁾。本稿を、わたしは出張先のノルウェーで執筆し

ているが、アムステルダムに向かう機中で“Fish or Veggie”と訊かれ、一瞬、耳を疑った。わたしにとってのベジタリアン用の機内食とは、シンガポール航空で移動する際にインド系の乗客が食すもの、という認識にすぎなかったからだ。そんなベジタリアンがKLMでは、2択のひとつとなっている

表3 キーワードに捕鯨をふくむ科研費プロジェクト一覧(29件) [2024年11月13日現在]

代表者	課題名	種目	分野	開始	最終	個人*
齊藤豪太	18世紀スウェーデンにおける漁業補助金制度に関する研究	基盤C	ヨーロッパ史およびアメリカ史	2022	2025	○
眞田康弘	日本の水産外交——その動態と変容	基盤C	国際関係論	2021	2024	○
渡部浩二	近世産業絵巻の基礎的研究	基盤C	日本史関連	2019	2021	○
竹川大介	紛争解決のための応報と修復の共同体ガバナンス——環境保護団体とイルカ漁の事例から	基盤C	紛争研究	2016	2019	○
岩本慎之	国際司法裁判所による司法的救済の現代的変容	基盤C	国際法学	2016	2018	○
玉田 大	国際司法裁判所における管轄権拡張法理とその問題点	基盤C	国際法学	2016	2018	○
遠藤泰生	19世紀中半のアメリカ合衆国における太平洋像とそこに映し出された合衆国理解の研究	基盤C	ヨーロッパ史およびアメリカ史	2016	2018	○
松岡信哉	環太平洋的/惑星思考的想像力が描くnaturecultureとしての環境表象研究	基盤C	英米・英語圏文学	2016	2019	3
大川 淳	食文化研究から読むMelville文学	若手B	英米・英語圏文学	2017	2018	○
赤嶺 淳	「フロンティア社会論」再考——北洋漁業における季節労働者の個人史に着目して	挑戦的萌芽	地域研究	2016	2018	2
柴田明徳	「条約体制内合意」の成立基盤——時間の流れの中にある条約の位相	基盤C	国際法学	2012	2014	○
渋谷百代	異文化対立の解決プロセスにおける内外コミュニケーション戦略の実際と課題及び可能性	基盤C	社会学	2011	2014	○
河島基弘	人間と動物の関係についての一考察——ベットブームとグルメブームの矛盾を手がかりに	基盤C	社会学	2011	2014	○
佐久間みかよ	19世紀アメリカ文学にみる「島」の表象——孤立と共存の思想・文化研究	基盤C	英米・英語圏文学	2011	2013	○
宇仁義和	もうひとつの近代鯨類学「第一鯨学」の形成と展開	基盤C	科学社会学・科学技術史	2011	2013	○
坂元茂樹	国際法の訴訟化への理論的・実践的対応	基盤A	国際法学	2011	2015	14
加藤久美	海洋資源利用における環境理念の普遍性、文化多様性とサステイナビリティ	基盤B	環境影響評価・環境政策	2010	2012	○
八木信行	新海洋像——その持続的利用を図る国際レジーム	新学術領域	複合領域	2012	2016	4
浜野喬士	人間・動物関係論の再構築——70年代以降の倫理学的動物論と哲学的動物論の影響関係	研究活動スタート支援	哲学・倫理学	2011	2012	○
兼原敦子	日本の海洋紛争に対する国際法政策	基盤C	国際法学	2009	2011	○
江上幹幸	東部インドネシアに残る巨石記念物の民族学的調査研究	基盤C	考古学	2007	2009	○
松本泰子	地球温暖化問題を中心とする複数の環境問題間の政策的相互影響に関する研究	基盤B	環境影響評価・環境政策	2005	2007	3
松田裕之	予防原則の定義と科学的基礎に関する学際研究	基盤C	環境影響評価・環境政策	2004		○
山浦 清	古墳時代以降における漁撈民の多様化に関する考古学的研究	基盤C	考古学	2004	2006	○
村田久美子	日英ニュースディスコースの比較分析——異文化理解の視点より	基盤C	外国語教育	2003	2004	○
遠藤泰生	1790年代から1880年代のアメリカ合衆国における太平洋像の変遷	萌芽	西洋史	1997	1999	○
高木彰彦	国際社会における現代日本の政治地理学研究	基盤A	人文地理学	1995	1996	8
平口哲夫	遺跡出土イルカ骨の計測値と非計測的形質による個別分析	一般C	文化財科学	1993	1995	○
岡田茂弘	19世紀収集の Smithsonian 研究機構所蔵日本関係資料の調査研究	国際学術	大学協力	1990	1992	8

出典：KARENより筆者作成。

*：○は個人研究、アラビア数字は研究代表者をふくむ共同研究者の人数。

わけだ⁷⁾。

KLMにかぎらず、訪問したベルゲンやオスロの街ではベジタリアンはおろか、ヴィーガンのサンドイッチも珍しくなく、多様な食様式が定着していることを痛感させられる。これがヨーロッパ世界の日常なのだとすれば、従来の「野生動物 vs 家畜動物」という枠組みを超えて、人間と動物の関係性という、より大きな視点から捕鯨問題をとらえていく必要がある。この分野での研究が発展していくことを期待している。

多面的に捕鯨を 議論しあう場を！

この小論で分析対象とした捕鯨研究 51 件からは、研究群 A (課題名) も研究群 B (キーワード) も、いずれも共同研究がすくないことがあきらかとなった。事実、2 名以上で組織されたものは、前者では 22 件中 4 件 (18%)、後者では 29 件中 7 件 (24%) にすぎなかった。

方法論的に研究室単位でおこなわなければならない鯨類学研究と異なり、たしかに捕鯨研究は単独で遂行できる利点もある。とはいえ、やはり再生産を可能とする教育研究制度が備わっていないことは致命的である。共同研究を組織しようにも、研究者の絶対数が少ないからである。

ここ、ノルウェーでも事情はおなじである。それでも、プロジェクト・ベースではあるとはいえ、確実に次世代を担う捕鯨研究者が誕生しているのは、心強いかぎりである。しかも、ノルウェー人のみならず、フィンランド人やイギリス人も参入してのことだ (女性がほとんどであるのも興味深い)。

わたしの場合は、幸運なことに岸上氏が組織したふたつの共同研究で多様な着眼に触れることがで

きたし、ノルウェーにおけるミンククジラ漁を調査する機会も頂戴し、日本の捕鯨を相対化することの必要性を痛感させられた。また、共同研究ではないものの、水産庁や GGT をはじめ、ナマコ研究で縁のあった水産関係・CITES 関係の人びとからも多大なる支援をいただけてきた。要は、多様な背景をもつ人びとと積極的にまじわることが重要なのである。

これまでにうけてきた学恩を、いかにして次世代の研究者に継承できるのか？

「ピンチはチャンス」でもある。制度的に再生産ができないからこそ、研究室の枠をこえて倫理学、法学、ガバナンス、ジェンダーなどといった人文社会系の学問を結集すれば、それだけ斬新で画期的な捕鯨研究が構築できるというものだ。

うれしいことに捕鯨に関心をもつ次世代研究者も、(ポツポツとはあるが) でてきている。本稿の準備中にその事実を発見し、小躍りしたものである。

残された現役生活で、わたしがやるべきことはあきらかである。科研費にかぎらず、あらゆる研究助成に挑戦し、国内外の次世代研究者とともに捕鯨研究を活性化させていくことだ。研究人生の終盤に一肌脱ごうとしているのは、なにも次世代研究者のためだけではない。わたし自身が学べるはずだし、そうした積みかさねのひとつひとつが、あらたな捕鯨研究の構築につながり、複雑に絡まりあった捕鯨問題群の解決に資するものと信じるからである。

* * * * *

1) 課題名に捕鯨をふくむものの中かには、英語で申請されて whaling とあるものと、課題名に捕鯨は冠されてはいないもの

の、鯨組をふくんだ研究も数えた。

- 2) 荒野泰典、2007、「この捕鯨研究になにを期待するのか、なにができるのか——2 年間の研究活動を振りかえって」、『立教大学日本学研究所年報』6、68 頁。
- 3) 湯浅俊介・辛承理・赤嶺淳、2024a、「韓半島東南部における捕鯨の記録①」、『一橋社会科学』16: 1-28、湯浅俊介・辛承理・赤嶺淳、2024b、「韓半島東南部における捕鯨の記録②」、『一橋社会科学』16: 29-57。
- 4) Aike P. Rots and Nhung Lu Rots. 2023. When Gods drown in plastic: Vietnamese whale worship, environmental crises, and the problem of animism. *Environmental Humanities* 15(3): 8-29.
- 5) 国際関係論 1 件をふくむ国際法学 6 件のうち、共同研究は国際法研究の権威・坂元茂樹氏が 14 名を動員して組織した基盤研究 A「国際法の訴訟化への理論的・実践的対応」(2011 年～2015 年) だけである。
- 6) 河島氏は 2011 年度から 2014 年度に「人間と動物の関係についての一考察」を、浜野氏は 2011 年度から 2012 年度に「人間・動物関係論の再構築」を実施した。
- 7) 2025 年 1 月 8 日から 2 週間にわたってノルウェーとスコットランドで捕鯨研究者と交流できたのは、United Kingdom-Japan Arctic Research Bursaries Scheme 2024-25 に採択された Arctic Artisanal Whaling in the Circumpolar North (代表 David Anderson アバディーン大学教授) によっています。自分の捕鯨研究を再考する機会を与えてくれた Anderson 教授に感謝いたします。